

硫黄からみた日本史と世界史

神戸女子大学准教授 山内晋次

日宋貿易と硫黄 10世紀末から13世紀後半にかけての日宋貿易を通じて、日本から中国に硫黄が輸出されていたことは、既知の事実である。そして、現存する諸史料を見る限り、日本産硫黄の中国への輸出は、この日宋貿易の開始とともに始まるようである。では、なぜこの時期から硫黄輸出が始まるのであろうか。

この疑問を解くカギは、中国における火薬および火器の発達の歴史にある。火薬は唐末9世紀の中国で発明されたと推定され、それは硝石・硫黄・木炭粉を主原料とする黒色火薬であった。そして、これ以後、中国において火薬の武器への利用が進められ、火砲箭などさまざまな火器が生まれた。このような火器が大きく発展するのが宋代である。

ただ、このような火器の使用拡大の一方で、宋代の中国には致命的な問題が存在した。それは、火薬の主要原料である自然硫黄を産出する火山が領域内にはほとんど分布しない、という事実である。とくに、北方の金の圧力により、支配領域を大きく南方に偏らせていた南宋においては、この問題はいつそう致命的であったはずである。つまり、火器の利用が拡大する一方で、その主要原料の一つである硫黄の国内自給ができない、という矛盾した状況だったのである。

そこで、宋の人々が硫黄の有力な輸入先の一つとして目をつけたのが、火山国・日本であった。そして、日本からの海を越える輸入を可能にしたのが、宋代中国で大きく発展した海上貿易という手段であった。

薩摩硫黄島とアジア この日宋貿易で輸出された硫黄の主産地の一つと考えられるのが、現在の鹿児島県の硫黄島である。この島は、太平洋戦争の激戦地であった東京都の硫黄島などのほかの硫黄島と区別するために、薩摩硫黄島とも呼ばれる。

この、薩摩半島の南約40kmに浮かぶ、周囲14.5km、人口110人余りの小さな火山島で採掘された硫黄は、往時、九州西岸の海上ルートで船に積まれて、最大の対中国貿易港であった博多に集積され、そこから宋海商の貿易船で中国に運ばれたと推測される。そして、このようにして宋に輸出された日本産の硫黄は、対西夏戦などの対外戦争でも、火器の原料として利用された可能性が高い。

このように、日本列島南辺の小さな火山島の歴史は、硫黄というモノを介して、中国や内陸アジアの歴史の動きとつながっていたのである。

海域アジアの「硫黄の道」 さて、宋の硫黄の輸入先は、日本だけではなくた。史料検索の視野をアジア全域に拡大していくと、火薬技術をほぼ独占していた当時の中国には、東南アジアのジャワ島や、西アジアのペルシア湾・紅海周辺などからも硫黄が流れこんでいた、という状況がみえてくる。中国海商のジャンク船やムスリム海商のダウ船などに積まれた硫黄が、これらの地域から中国をめざしてインド洋や南シナ海を横切ったのである。

このような、宋代の中国を吸収核とし、日本列島から西アジア地域におよぶ広大な硫黄の海上流通の状況をながめるとき、そこには硫黄でつながった一つの歴史の道がみえてくる。私は最近、その道を「海域アジア」における「硫黄の道」と呼んでいる。

日本史と世界史の垣根 現在の日本では、さまざまな場面で「国際化」や「グローバル化」が叫ばれている。しかし、その一方で歴史の研究・教育の現場においては、「日本史」と「世界史」のあいだに、依然として越え難い垣根があるように思えてならない。

このような研究・教育状況のなかにあって、ここで提示した「硫黄の道」という歴史の視点は、今後、「世界史」とのつながりを明確に語る「日本史」や、きちんと「日本史」を組み込んだ「世界史」などを模索していく過程で、なにかの役に立てるように思うが、いかがであろうか。